



伯耆大山きたらぼくノ天然純林

(大正十五年六月竹中要撮影)

テ Ludowig. Pfeiffer ノ Nomenclator
botanicus ニ據リタルモノナルコトヲ附
記シテオク

○伯耆大山ノ自然生きたら ぼく

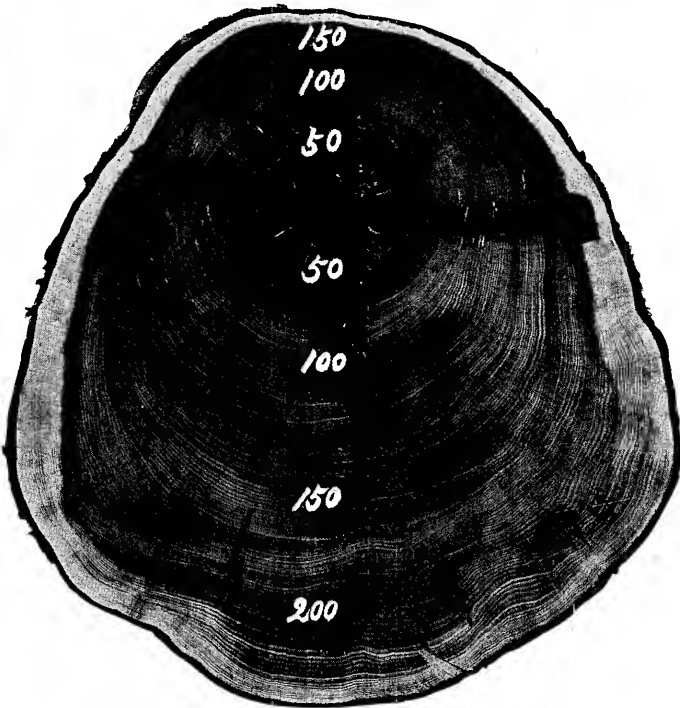
東京帝國大學理學士 竹中 要
學部植物學教室

きたらぼくと云へば直チニ伽羅木ヲ思ヒ
出スガ此處ニ云フノハ決シテソレデハナ
イ

伯耆ノ大山ダイセンニ登ルト山頂近クニ一面ニ丈
ケノ低いいちゐノ様ナ木ノ盛シナ群落ヲ
見ル、ソレガきたらぼくデアル (本誌第
三卷第七號ノ口繪參照)

元來きたらぼくと云フノハいちゐノ別名
デアッテいちゐガ伽羅の木ノ様ナ香氣ヲ
持ッテキルカラサウ稱ヘル様ニナッタノ
ダト云フ事ダ、今デモ東北地方へ行クト

伯耆大山ノ自然生きやらぼく



伯耆大山きやらぼく大枝ノ横断面、數字ハ年輪ノ數ヲ示ス
(竹中 要 撮影)

いちねノコトラきやらぼくと呼ンデ居ルガ
我植物社會デハ *Taxus cuspidata* Sieb. et
Zucc. var. *umbraclifera* MAKINO. (= *T.*
cuspidata Sieb. et Zucc. var. *nana* Rehd.)
ノ和名トナツテキル即チ前記大山ノガソレ
デアル
一體從來カラ日本全國ニ廣ク庭園樹トシテ
此きやらぼくガ存在シテキルコトハ世人ノ
普ク知ル所デアルガ然シ其天然ニ自生シテ
キルモノハ唯伯耆ノ大山ト其山彙ノ内ノ二
三ノ山ノ頂上近クニ僅カニ知ラレテキルダ
ケニ過ギナイ様デアル、大山近クノ中國地
方ノ諸山ニ於テモいちねハ僅カニ存在ノ痕
跡ヲ留メテハキルガきやらぼくと見出スコ
トガ出来ナイノハ面白イ現象デアルト思
フ、此大山ニきやらぼくの生ジテ居ルコト
ハ近日ノ發見デハナク既ニ牧野先生ハ今カ
ラ二十二年前ノ明治三十九年八月二十一日
ニ親シク之ヲ採集シテ疾ク同山ニ其天然生

ノアルコトヲ知ツテ居ラレタ

いちゐト異ツテ高サハ僅カ數尺ダガ横ヘト擴ガツテキテ大山デハ一株デ優ニ數反歩ヲ覆フテキルノデハナイカト思ハレルモノガアル、其材ノ年輪ハ甚ダ細カデ前頁ノ寫眞ニ示ス通りデアルガ此寫眞ノモノハ幹ノ上側ハ下側ニ比シテ發達不完全デ從ツテ年輪ノ數ガ少ナイ(是レハ多少傾斜地ノモノデアルセイデモアラウカ)兎ニ角伯耆ノ大山ニ此ノ様ナ林叢ガアルノハ頗ル珍ラシイコトダ、幸ニ先頃コレガ天然記念物トシテ内務省デ保存サレル様ニ指定サレタノハ何ヨリ喜バシイコトデアル

○あかめがしは等ノ芽ノ色

東京帝國大學、藥學科、生藥學教室 藥學士

木

村

康^{カウ}

一^{イチ}

あかめがしは (*Mallotus japonicus* Murr. Arg. たかとうだい科) ハ其名ノ如ク其嫩葉ハ誠ニ美シイ紅色ヲ呈シテ居ル、試ニ其表面ヲ「ルーベ」デ檢スルニ無數ノ紅ク染ツタ毛ガ密生シテ居ルノガ認メラレル、爪デソツトカイテミルト其毛茸ハソックリ分離シテ葉ノ表面ガ現ハレル葉ソノモノハ綠色ヲ呈スルノミデ何等紅色ヲ帶ビテ居ナイ、紅イ毛茸ノ少許ヲ取り顯微鏡下ニ檢スルニ洋紅色ノ色素溶液ヲ滿シテ居ル星狀毛デアルノヲ認メル、色素溶液ハ多クハ毛ノ中ニ全滿シテ居ルガ中ニハ全滿シテ居ナイ許リデナク球狀ヲナシテ點在シテ居ルノモアル、此星狀毛ハ嫩葉ニ於テハ紅色ヲ呈シテ居ルガ已ニ數廻ニ生長シタ葉デハ紫紅色デ更ニ生長シタモノニアツテハ紫褐色乃至紅褐色或ハ進ンデ黃褐色ヲ呈シテ居ル、星狀毛ノ存在ハ葉ノ裏面ヨリハ表面ニ密デ往々裏面ニハ全ク色素ヲ缺イダ星狀毛ヲ有ツテ居ルノモアル、又成葉ニ於テモ毛茸ノ分布極テ粗デアルノハ葉ノ生長ニヨル表面積ノ擴張ニ拘ハラズ毛茸ハ特ニ増加セズ且却テ脱落シ易イ爲デアラウ、此様ナ譯デ嫩葉ノ表面ハ其葉ノ内部ノ葉綠素ノ呈スル綠色ガ葉ノ表面ニ密生スル毛茸ニ蔽ハレテ此ニ美シイ紅色ヲ呈スルノデアアル

あかめがしは等ノ芽ノ色